八幡4号古墳・袖裏遺跡
発掘調査報告書

可児市教育委員会

序

飛騨・木曽川両河川と、その支流が築いた私たちのまち「可児」は、古くから人々の栄えた所として知られています。

今回、土田地内の八幡4号古墳と袖裏遺跡が、宅地開発により消滅しようとしたため緊急に調査を行い、記録保存を図ることとなりました。発掘調査の時点ですでに一部削平を受けていましたが、幸いにも古墳石室の基底部が検出され、おおまかに古墳のようすを知ることができました。

木曽川から運んだと思われる川原石を、ていねいに並べた石室は、千数百年の隔たりを乗り越えて、現代に生きる私たちに当時の人々への思いをあれこれ思いめぐらす機会を与えてくれました。

副葬された須恵器から、7世紀代に作られたものと推定され、この地域の古代の解明に本調査が少しでも役立てば幸いに思います。

最後に、調査をするにあたりまして、ご理解ご協力いただきましたマルヤス不動産をはじめ土地所有者の皆様、また、作業にあたられました渡地区の皆様方に対し、厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

可児市教育委員会

例　　言

1．本報告書は、岐阜県可児市土田字渡2907－1、同2930－1番地に所在する八幡4号古墳、袖裏遺跡が、宅地造成により消滅しようとしたため、可児市教育委員会が実施した調査報告書である。

2．現場での発掘調査は、昭和55年11月1日より、同12日まで実施した。

3．発掘調査にあたっての調査員は、中島勝国と亀谷泰隆が当たり、本報告書の執筆、実測図作成、トレース、遺物写真撮影は亀谷が行った。石器の石材は、奥谷一勝氏に依頼した。

4．出土遺物は、可児市教育委員会が保管する。

5．本遺跡を調査するにあたり、マルヤス不動産株式会社をはじめ、遺跡の立地した土地の旧所有者、土田渡地区の人々に大変お世話になった。

八幡4号古墳、袖裏遺跡発掘調査　調査団構成（調査当時）

可児町教育委員会　教育長------工藤新二

可児町教育委員会　社会教育課長-----小沢末広

調査主任　岐阜県考古学会員-----中島勝国

調査員　〃　------亀谷泰隆

県文化課　------波多野寿勝

可児町文化財審議会委員　------佐藤鐊平

〃　------金子一郎

〃　------森川益三

〃　------続木　正

〃　------安藤寿作

〃　------平田録郎

〃　------稲垣雄之助

〃　------奥谷一勝

〃　------上野晃司

事務担当　町社会教育係長------藤田弘武

〃　町社会教育係------亀谷泰隆

尚、本調査は、市制施行以前に行ったものであり、調査当時の職名を使っている。

目　　次

序
例言
調査団構成
目次

Ⅰ．八幡４号古墳、袖裏遺跡付近の地形と周辺遺跡……1
Ⅱ．発掘調査に至る契機と経過……4
Ⅲ．八幡４号古墳……6
　１．主体部
　２．出土遺物
　　(1)　鉄鏃
　　(2)　須恵器
Ⅳ．袖裏遺跡……9
　１．遺構
　２．出土遺物
　　(1)　鉄鏃
　　(2)　土器、土製品
　　縄文式土器
　　弥生式土器
　　その他の土製品
　　(3)　石器
Ⅴ．まとめ……18
Ⅵ．図版

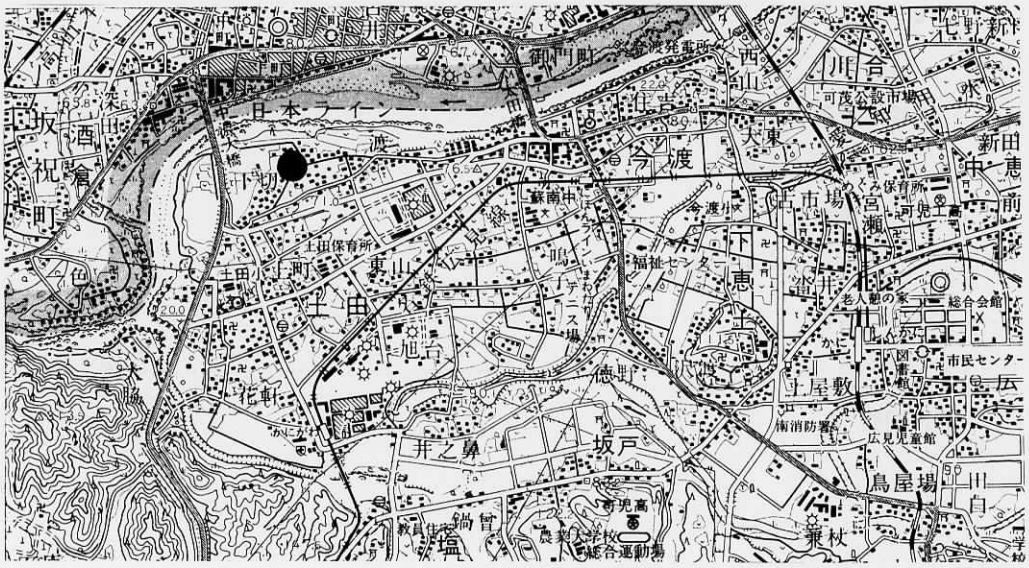
Ⅰ．八幡４号古墳・袖裏遺跡付近の地形と周辺遺跡

八幡４号古墳・袖裏遺跡は、岐阜県可児市土田に所在し、今回、渡2907－１、同2930－１を発掘調査した。可児市は、岐阜市の東方約30kmに位置し、東は同郡御嵩町、南は多治見・土岐の両市と、北は木曽川をへだてて美濃加茂市、西は山続きで愛知県犬山市と接している。

遺跡の所在する土田地区は、可児市の北西部、木曽川が形成した低位河岸段丘上で、遺跡はこの段丘の北側、木曽川から約 300m の川沿いの平担地に位置する。この低位河岸段丘は、土田、今渡、川合地区に広がる東西 5.5km、南北１kmから 1.5kmの帯状の平担地（海抜70～85m）で、さらに木曽川沿いや小河川沿いに比高差２m から５m 前後の段をもつ。八幡４号古墳、袖裏遺跡の所在する所もこうした小さな段丘の北端に位置し、北西部側は、比高差３m で現在水田となっている。

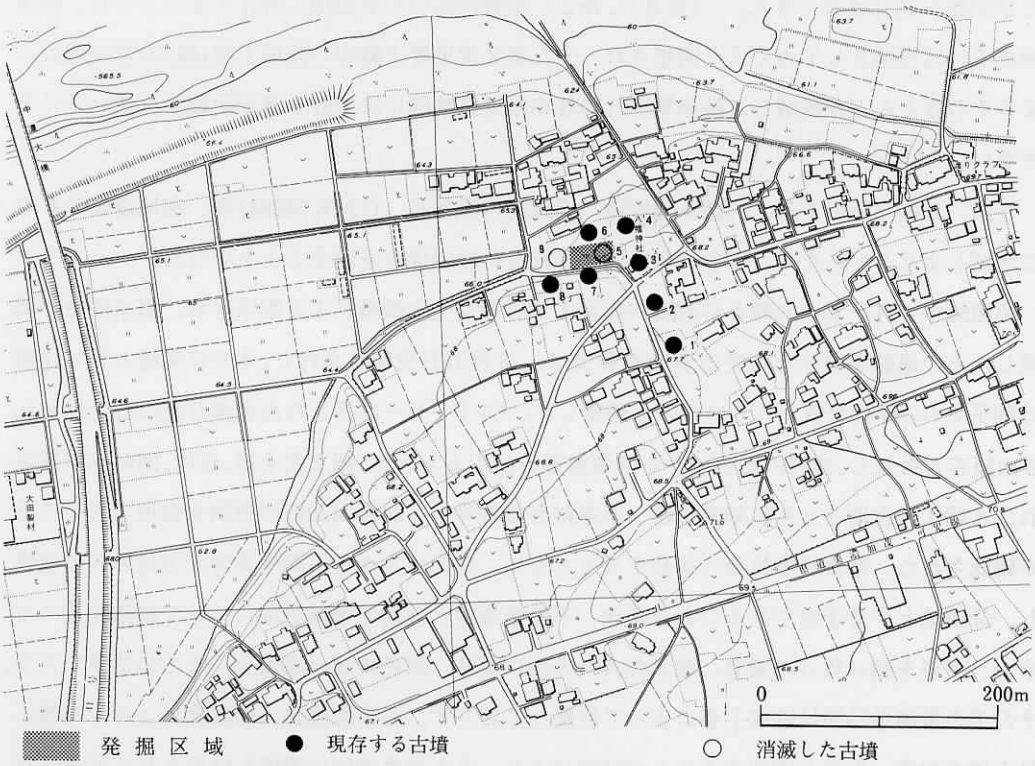
また、この低位段丘面は、県下でも有数の古墳群として知られ、昭和34年の調査により所在のつかめた古墳の数は土田地内で112基にのぼり、かつて「百々塚」と呼ばれていた。(註１)
しかし、そのほとんどが開墾等により消滅し、今回の調査時で、わずか11基を数えるのみであった。これらは、いずれも八幡４号古墳周辺の竹林に存在するもので（第２図）、八幡１号古墳を除いて保存状態は悪い。規模等については、表１のとおりである。

八幡４号古墳とともに調査の対象となった袖裏遺跡は、今回の調査区が西北端となり、南方の平担面にほぼ現在の渡集落と同様に広がるものと推定され、縄文式土器の他に、土師器などが採集されている。（註２）



●八幡４号古墳、袖裏遺跡　５万分の１

第１図　遺跡周辺図



第2図　周辺古墳の分布

表1　八幡4号古墳周辺の古墳一覧表

番号	名　称	保存状態	墳丘形態	規　模	主体部	遺跡地図番号
1	八幡1号古墳	墳丘、石室とも良好	円　墳	径15m　高3.7m	横穴式石室、西に開口	
2	八幡2号古墳	半　壊	不　明	径10m　高1.5m	不　明	
3	八幡神社古墳	〃	不明、葺石	径14m　高2.1m	〃	
4	八幡3号古墳	墳丘、石室半壊	不　明	径10m　高2.8m	横穴式石室南西に開口	
5	八幡4号古墳	本調査により消滅	〃	不　明	〃　〃	G34K04694
6	八幡5号古墳	墳丘一部残存	〃	径12m　高1.8m	不　明	
7	八幡6号古墳	〃	〃	径不明　高1.7m	〃	
8	八幡7号古墳	〃	〃	径13m　高1.3m	〃	
9	八幡8号古墳	消　滅	〃	在存したと言うが、現状では痕跡なし		

岐阜県遺跡地図には9基の古墳が登録されているが、詳しい分布が不明なため、遺跡地図番号は明確なものだけを記載した。規模については推定値。

Ⅲ．発掘調査に至る契機と経過

可児市土田地区は、有数の群集墳が存在する所として古くから知られ、林魁一によってたびたび学界へ紹介されてきた。（註３）しかし、木曽川沿いの平担地に所在することから、耕作地あるいは宅地として古くより開墾され、また第２次世界大戦中の萱場工業(株)の社宅建設によりそのほとんどが消滅し、岐阜県発行の岐阜県遺跡地図には合計９基が記載されているにすぎない。

今回、このうちの１基、八幡４号古墳（県遺跡台帳番号　G34K04694）が、宅地造成のために消滅しようとしたため、緊急に発掘調査を行ない記録保存を図ることとなった。

昭和55年８月下旬、八幡４号古墳が存在する竹藪が土木機械により削平され、盛土部分が消滅したとの連絡を受けた可児市教育委員会は、８月31日現場へ急行し、すでに宅地として竹藪は削平され、砕石が敷かれているのを確認した。ブルドーザーに押された古墳石室の石と思われる川原石が散乱し、砕石のない所からは須恵器の破片とともに、縄文式土器、石斧、凹石が表採され、八幡４号古墳とともに袖裏遺跡（県遺跡台帳番号　G34K04700）の遺物包含地であることが確認された。県教育委員会へ連絡するとともに、地元の人から不動産業者が宅地として造成し、分譲地とする予定であることを聞き、不動産業者との間で事後処理について協議を進めた。幸い、工事を請け負った業者、地元の人々の話により、黒色土層（腐植土）までの造成であり、その下の黄褐色砂層は造成工事によって移動しておらず、石室基底部、周溝等により、八幡４号古墳の規模、形態を確認することが可能であり、また袖裏遺跡の遺構も検出される可能性があることがわかった。県教育委員会の指導によって、すでに盛土部分は消滅しているものの規模確認のための調査を行うこととし、10月７日、可児市文化財審議会を臨時に開催、不動産業者の協力のもと発掘調査を進めることで具体的に協議を始めた。

発掘方法は、南西１本、南北１本の幅２ｍのトレンチを設定し、４ｍごとにＡからＬまで地区名をつけ、遺構確認を行うことにし、調査期間は１週間とした。調査費用は不動産業者が負担することで協力が得られ、10月29日に機械力により砕石を除去、11月１日より現場での作業を開始した。

発掘調査の経過

11月１日　可児郷土歴史館より発掘用資材搬入、午後より、トレンチを設定する。

11月２日　Ａ.Ｂ.Ｃ地点より掘り始める。後世の攪乱がひどく、ビニール等のゴミが大量に出土。発掘区域の平面図を作成する。

11月３日　Ｊ.Ｋ地点の発掘を開始、Ａ.Ｂ.Ｃ地点は、砕石除去面から黄褐色砂層（地山）まで20㎝程度で、ゴミ穴の他遺構を確認することができなかった。

11月4日　K地点より、石室基底部と思われる石組を検出、東へ石組が延びているためK地点の東側へトレンチを拡張する。縄文式土器は、各地区より検出されるが、まとまった状態では検出されない。

11月5日　K地点拡張区には、石室構築用と思われる川原石が散存し、古墳石室であることを確認、八幡4号古墳とする。散在する川原石の間から鎌1点を検出する。

11月6日　美術展のため、作業中止。

11月7日　石室は、側壁の一段目から二段目を有するのみで、上部はすでに破壊されていることを確認する。また玄室奥部が、調査区域外へ延びているため、土地所有者と交渉して区域を拡張することにする。

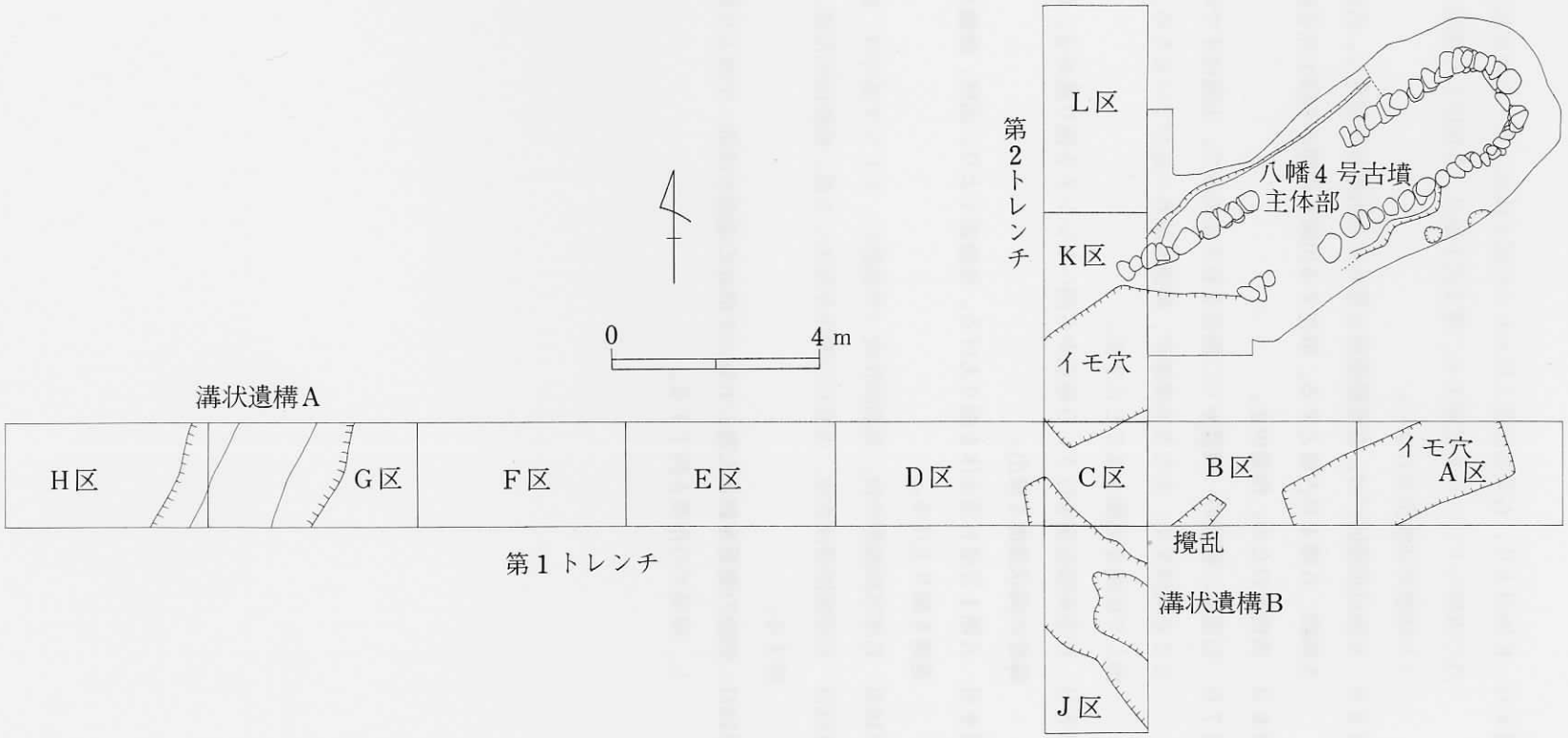
11月8日　石室奥部拡張を行う。D地点から西へトレンチを掘り進める。G地点で、幅3m程度の溝状遺構を検出。

11月9日　八幡4号墳石室全体を掘りあげる。奥壁近くより、高杯、鉄鏃を検出。G地点の遺構を掘り上げる。

11月10日　石室写真撮影の後、実測図作成（平面図）。トレンチ部分は、掘り上げ完了する。

11月11日　石室横断面図作成、川原石の礫床を除去した後、縦断面図作成、側壁の実測を開始する。

11月12日　側壁の測量を終えた後、トレンチ部分の遺構を測量、午後より発掘用資材を撤収し、現場での作業を終了する。



第3図　トレンチ設定図、全体遺構図

Ⅲ. 八幡4号古墳

1．主体部

後世の攪乱、あるいは今回の宅地造成による削平を受けていたので、保存状態はあまり良好ではなかった。西南方向5－57°－Wに開口する横穴式石室で、川原石積みの所謂胴張り形をなし、羨道入口、羨道左壁、玄室右壁はすでに破壊されていたが、玄室奥部は比較的よく遺存していた。石室は、残存部全長7ｍ93㎝、玄室全長3ｍ65㎝、羨道部残存長4ｍ28㎝で、胴張りの玄室最大幅1ｍ40㎝、羨道部幅約1ｍ90㎝であった。

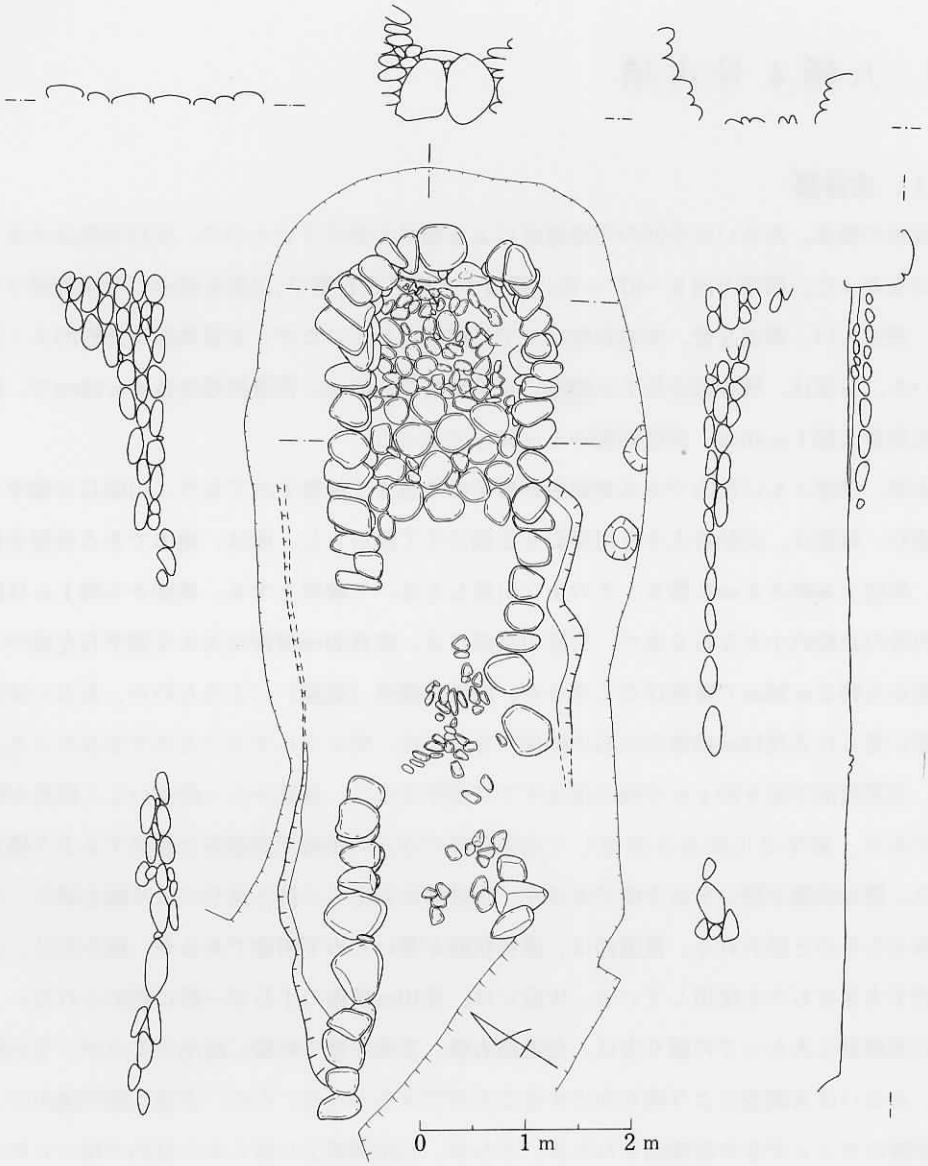
玄室、羨道ともに地山である黄褐色砂層をほり込んで構築されており、川原石の偏平なものを積む。奥壁は、比較的大きな川原石を2個立てて鏡石とし、床は、地山である砂層を掘った後、黒色土を厚さ4㎝に敷き、その上に川原石を並べて礫床とする。奥壁から約1ｍは直径15㎝内外の比較的小さな石を並べ、玄室中央部には、直径30㎝前後の大きな偏平石を並べている。奥壁から約2ｍ30㎝で礫床はなくなるが、後世の攪乱（盗掘）によるものか、あるいは羨道部床面に見られる径10㎝前後の小石の礫床になるかは、明らかにすることはできなかった。側壁は、玄室奥部で高さ約1ｍが残る他はすでに削平を受け、基底から一段ないし二段目が残るのみであり、偏平な川原石を利用して玄室奥部では石の長軸が側壁面と直交するよう積まれていた。遺存状態が悪いため不明であるが、天井部はおそらく持ち送りにより幅を減じ、天井石を乗せたものと思われる。羨道部は、遺存状態が悪いため不明瞭であるが、積み石は、玄室より若干大きなものを使用している。床面には、径10㎝前後の小石が一部に認められた。

石室構築にあたっての掘り方は、羨道部右壁、玄室左壁で明瞭に検出されたが、その他は攪乱、あるいは未調査により明らかにすることができなかった。ただ、玄室左側の地山に、径30㎝前後のピットが2か所検出されたが、これが、石室構築上に何らかの目的で用いられたものなのか、古墳構築前のものかは不明であった。共に、褐色の覆土を持ち、縄文式土器の破片が数点ずつ検出されたのみであった。

2．出土遺物

前述したように遺存状態が極めて悪く、また古くより副葬品の堀り出しを目的とした盗掘を受けていた関係上、出土遺物は少なかった。玄関奥壁付近の床面より須恵器高坏1点、鉄鏃11点が検出され、その他本古墳に伴うものとして器形の一部が知れる高坏脚部、提瓶などが出土した。

（1）鉄鏃　（第5図8～13・15～19、図版5）

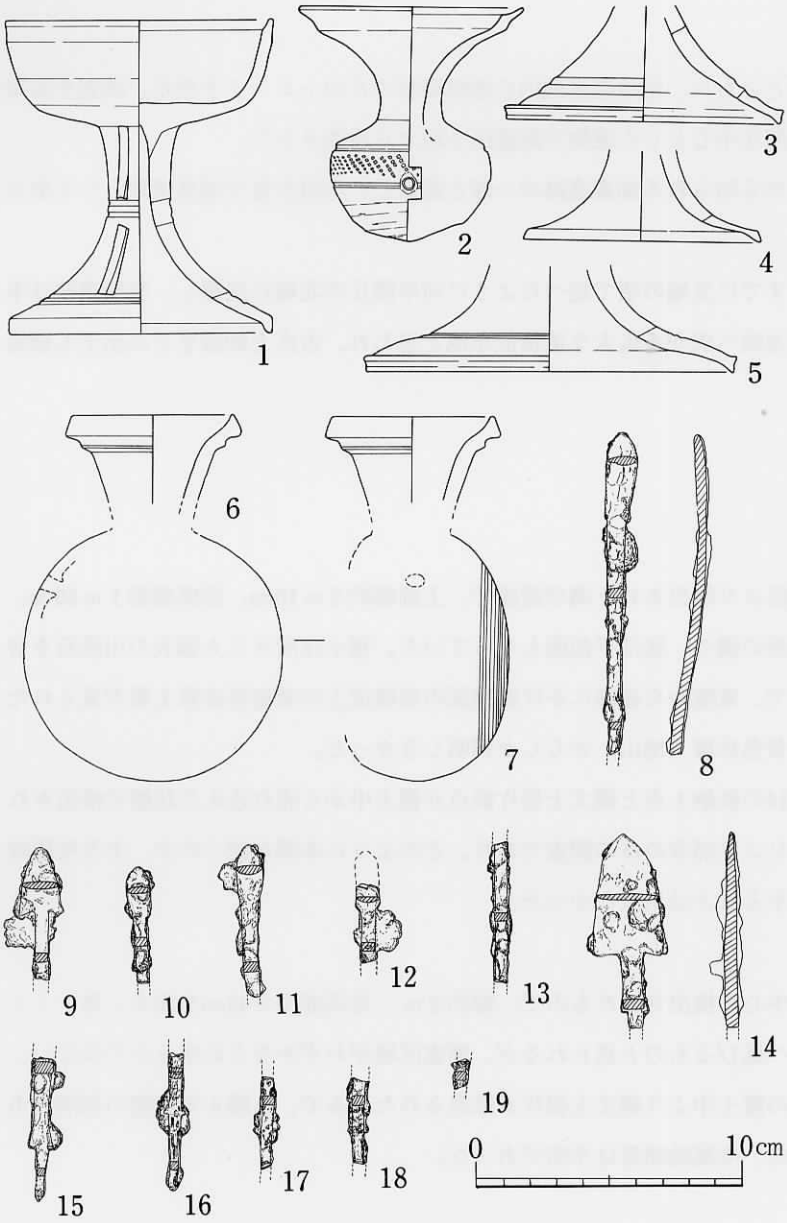


第４図　石室実測図

破片も含め11点が出土した。その内、鏃身が判かるものが５点あり、９は有茎式平根鏃で、鏃身長 2.6cm、幅 1.5cmを測り、揚抉が深い。８、10～12は、有茎式尖根鉄鏃で、鏃身長２cmのものと 3.2cmのやや長めのものとがある。茎部はいずれも断面四角形で、16の茎部には木質部の痕跡が残っている。

（２）須恵器　（第５図１～７　図版５）

●高坏　全体の器形が知れるもの１個体と脚部だけのものが検出された。１は無蓋高坏で、坏部口縁は内面に一段の稜を持ち体部は丸味を帯びる。脚部は筒状でラッパ形に開き、中央に２本の沈線をめぐらし、この沈線の上下に２段の細長い四方形透しが３方向にある。下段の透し



第5図　八幡4号古墳遺物実測図

の下にも2本の浅い沈線が施され、接地部端部は垂直に下方へ屈曲する。破損部断面、表面とも赤味を帯びた褐色で細かい砂粒を含む。3～5も、同じく高杯脚部の破片で、3方向の透しを持つが、3、5の接地部は端部を張り出すように屈曲させ稜を作っている。

●瓮　2に示すもので全体に小さく、小形の体部に大きくラッパ状に開く口縁を持つ。口頸部は細く、施文も体部上半に限られている。底部には右回転のヘラケズリが見られ、胎土に若干砂粒を含むが焼きが良い。

●提瓶　6、7と焼成、色調から同一個体の胴部片と口縁部片と思われ、小形のものである。胴部は丸味を帯び、正面には同心円状のカキ目調整痕が見られ、側面中央部に1ヵ所径7㎜の穿孔が見られる。口縁部は、2段に屈曲して稜を持つ。

●その他　本古墳に伴うものとして、自然釉が厚く掛った叩き目のある壺と思われる破片などが出土したが、いずれも少数、細片のため、器形等不明であった。

Ⅳ．袖裏遺跡

八幡4号古墳の調査とともに、宅地造成地内の遺構確認のためトレンチを設定、調査を実施した結果、縄文時代後期を中心とした遺物が調査区全域から検査された。

所在場所より、古くから知られる袖裏遺跡の一部と認定し、本報告書で袖裏遺跡として取り扱うことにした。

今回の調査区域は、すでに立地の項で述べたように河岸段丘の北端に位置し、当該遺跡は本地点を西北端に、南東方向へ広がる広大な遺物散布地と思われ、古式土師器などの出土も確認されている。

1．遺構

溝状遺構　A

第1トレンチG、H区より検出された溝状遺構で、上部幅約3ｍ10cm、底部幅約1ｍ50cm、深さ90cmの断面「⌣」形の溝で、底は平担面となっていた。覆土は所々に人頭大の川原石を含むほぼ単一の黒色土層で、東壁から底部にかけ溝壁面の崩壊流土の黄褐色砂質土層が見られたのみで、堀り込み面は黄色砂層（地山）からしか判明しなかった。

出土遺物は、第5図14の鉄鏃1点と縄文土器片数点が覆土中から流れ込んだ状態で検出されたのみで、幅2ｍのトレンチ部分のみの調査であり、どのように本溝が続くのか、また所属時期等について明らかにすることは出来なかった。

溝状遺構　B

第2トレンチJ区を中心に検出されたもので、幅約2ｍ、最深部深さ45cmを測る。第1トレンチC区より南東方向へ延びるものと思われるが、調査区域がわずかなため明らかではない。

出土遺物は、黒色土の覆土中より縄文土器片が散見されたのみで、八幡4号古墳の周溝にあたる可能性はあるものの、所属時期等は不明であった。

その他

第1トレンチB区より、後世のイモ穴らしきものが検出され、ビニール等が出土した。

2．出土遺物

（1）鉄鏃　（第5図14、図版5）

有茎式平根鉄鏃で、鏃身長 4.6cm、幅 2.7cmを測り、揚抉は直線的である。八幡4号古墳に伴うものか、あるいは消滅したとされる八幡8号古墳のものかは明らかでない。

（2）土器、土製品

調査区全域からコンテナ箱1杯程度の土器が出土したが、遺構の項でも述べたようにそれらに伴う遺構は検出されず、また集中して出土したところもなかった。土器の大部分は無文の土器であり、またわずかに出土した施文のある土器片も少破片が多くまとまった資料ではなかった。以下文様のあったものほとんどを拓図で示し、概要を述べることにする。

縄文式土器

1類（第6図1～12、図版6）

主に縄文と沈線により施文されるもので、1の斜行縄文のみで施文されるものも本類に含めた。1～3は、他に比べて器厚が厚く、沈線で区画した中に縄文を充塡することから中期後半の土器に比定される。5～8は、所謂磨消縄文と呼ばれる文様を持ち、5は八王寺式土器の中に類例が求められる。9～12は、同じく沈線と縄文により施文されるが、沈線を引いた後に縄文が施されるもので、10～12は沈線間の隆帯部分に縄文が付く。10・12は中村遺跡（註4）のⅡ－Ⅲ類土器に類例があり、後期中葉に位置ずけられるものと思われる。

2類（第6図13、図版6）

隆帯を持つもので1点出土した。口縁部小破片で、灰白色を呈し、隆帯上には刻目が付けられる。

3類（第6図14～21、図版6）

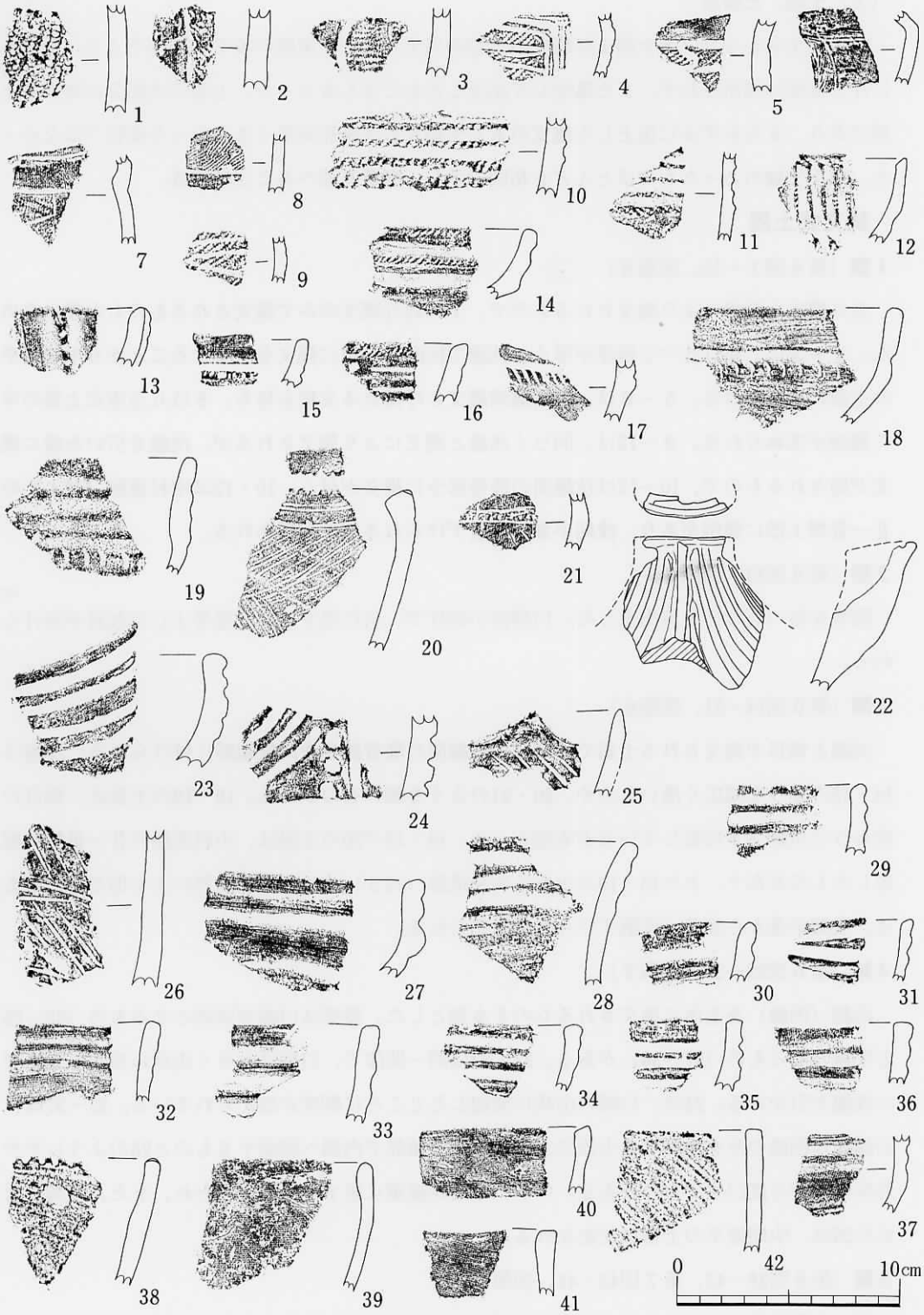
沈線と刻目が施文される土器で、刻目は沈線間の隆帯部分や口縁端部に付けられる。沈線は14・16のような幅広く浅いものや、20・21のような細いものがある。18・19の土器は、刻目の変わりに爪形文を付加しているが本類とした。14・15や20の土器は、中村遺跡のⅡ－Ⅲ類に類似したものがあり、また18・19の土器は馬場遺跡（註5）の馬場Ⅲ式土器によく似たものがある。後期中葉から後葉に位置ずけられると思われる。

4類（第6図22～37、図版7）

沈線（凹線）を主体に施文されるものを本類とした。器形は口縁が波状となるもの（22～25）と平縁となるもの（27～36）がある。22・23は同一個体で、口縁は大きく山状に突起し太く深い沈線が引かれる。24は、口縁の山状に突起したところに刺突が加えられている。27～37は、口縁部に凹線のみを施文する土器で、27のような頸部で内側へ屈曲するものと28のようにやや外反しながら直口するものがある。いずれも後期後葉に属する一群と思われ、また、本類に含めた26は、中期後半の土器に比定される。

5類（第6図38～42、第7図43・44、図版8）

出土土器のほとんどを占める無文の土器片や条痕のある土器片を本類とした。38～41は、無


1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
10cm

第6図　袖裏遺跡出土器

文の口縁部で、38には口唇部に刻目が加えられている。直口するものと内湾するものがある。条痕のあるものは42・44で、雑な浅い条痕がつく。44は、土師器かとも思われ、ヘラ状工具による調整痕が条痕状に加えられている。

6類（第7図45～48、図版7）

浅鉢、把手、注口土器を本類とした。45・46は浅鉢の口縁部片で、45には内面に沈線と刻目による施文が施される。把手は、2か所に孔があり、馬場遺跡（註6）の中に類例が求められ、後期後葉に比定される。注口部は、1点出土し、基部に一条の沈線がめぐる他文様はない。

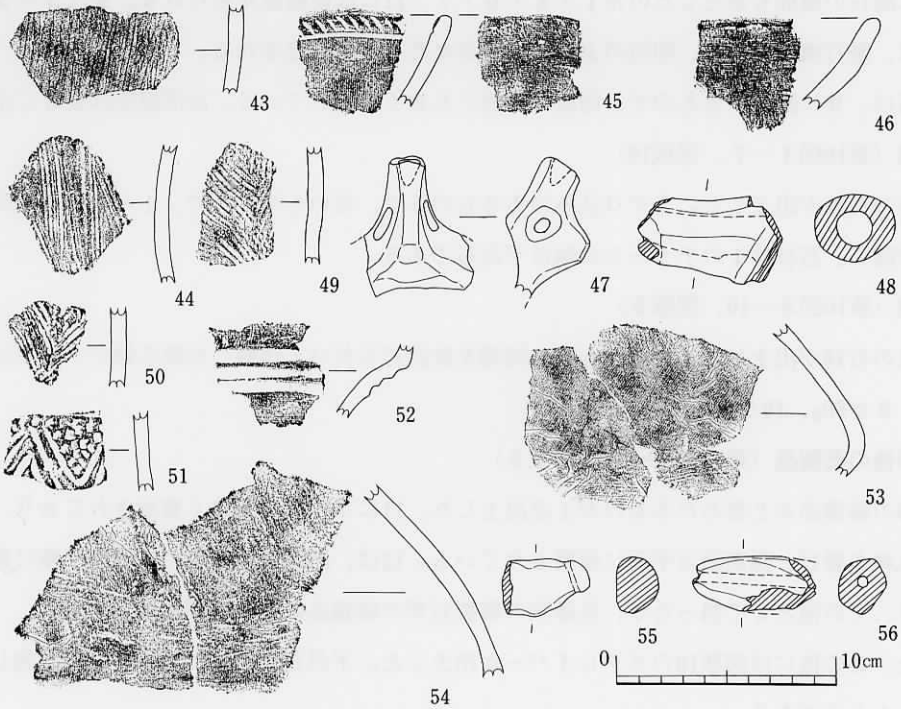
弥生式土器（第7図49～54、図版8）

弥生式土器と思われるものが数点出土した。49・50は、甕形土器の胴部破片と思われ、羽状の条痕が縦にみられる。51は、壺の頸部と思われ、沈線と刺突文により施文される。53・54は同じく壺の胴部と思われ、下ぶくれ状に胴部が張り、53には細い条線が付加される。

その他の土製品（第7図55・56、図版7）

土偶が1点、土錘が1点出土した。55の土偶は腕部のみで、手首は浅い沈線で表現されている。断面は片膨れの楕円形を呈す。

土錘は、径2.5cmの断面不整円形を呈し、径4mmの孔が直線的に穿たれている。残存重量32gを測る。



第7図　袖裏遺跡出土土器・土製品

（3）石器

磨製石斧（第８図１、２、図版９）

いずれも破損品で、定角式の１と、乳棒状の２の２点出土した。石材は共に片麻岩と思われ、２は表面を良く研磨している。計測値は表２に示すとおりである。

打製石斧（第８図３～19、図版９）

破片も含め、総数24点が出土した。大部分が第１トレンチＥ区より東方の各区より検出されたもので、石質はすべて粘板岩である。形態は、短冊形13点、撥形９点、不明２点であり、またほぼ完形と思われるものは４点を数えるのみであった。刃部のわかる破片のほとんどに磨耗痕が観察され（実測図に於いて縦の線で示した）、なかには磨耗痕が、８、15のように頭部側面に認められるもの、10のように頭部破損面に認められるものがあり、また14の頭部端には研磨面が見られる。また、19は石斧としたものの、厚さ0.8cmと極めて薄く、両側面に磨耗痕があることから、側面を主に刃部として使用したものと思われる。

凹石、磨石（第９図、図版10）

凹石10点（１～８、10～11）、磨石１点（９）が検出された。凹石は、いずれも敲打によって石の表面に凹みがあるもので、両面に１か所づつあるもの６点、片面に１か所３点、両面と側面に各々１か所づつのものが１点ある。ほとんどが丸い扁平な川原石を利用しており、凹みの他に磨石の機能も果たしたのか１・４・６・７・11には研磨面が見られる。また３～５の側面には、敲打痕が見られ、叩石のように利用されたことが推定される。

磨石は、９に図示するもので、両面、側面とも良く磨かれている。計測値等は表３に示した。

石鏃（第10図１～７、図版10）

７点の石鏃が出土した。えぐり込みのあるもの５点、ないもの２点で、１・２・４はえぐり込みが深い。石材は１のチャートの他は下呂石である。

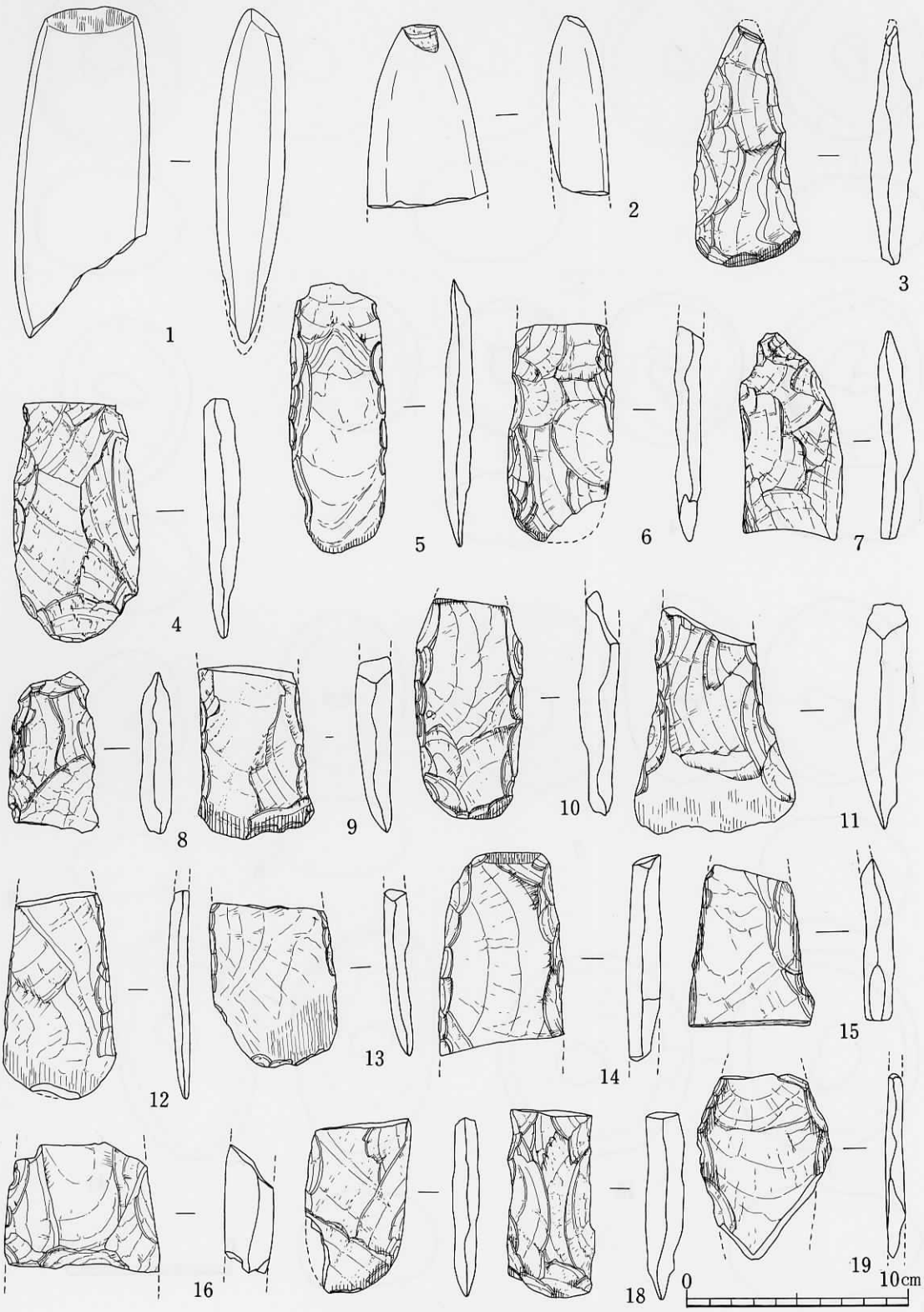
石錘（第10図８～10、図版９）

３点の石錘が出土した。いずれも礫の両端を数回打ち欠いて作製した礫石錘で、重さは８が125g、９が60g、10が100gであった。

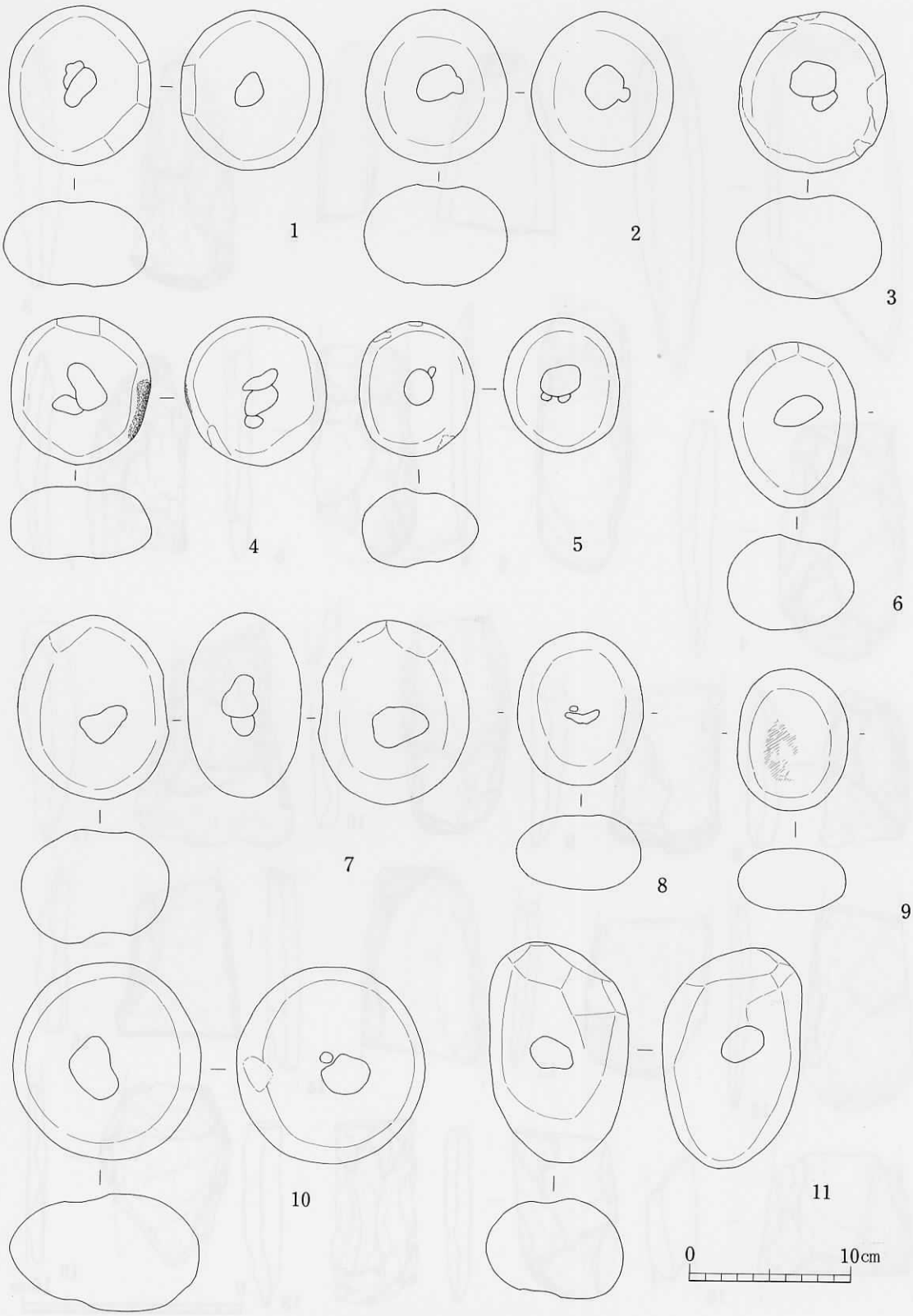
その他の石製品（第10図11～12、図版９）

石棒の破損品かと思われるものが１点出土した。11に示すもので良く整形されており、表裏面は丸味を帯び、両側面は平面に研磨されている。12は、断面が楕円形で表面は丁寧に磨かれており、その他として扱ったが、乳棒状の磨製石斧の破損品の可能性が強い。

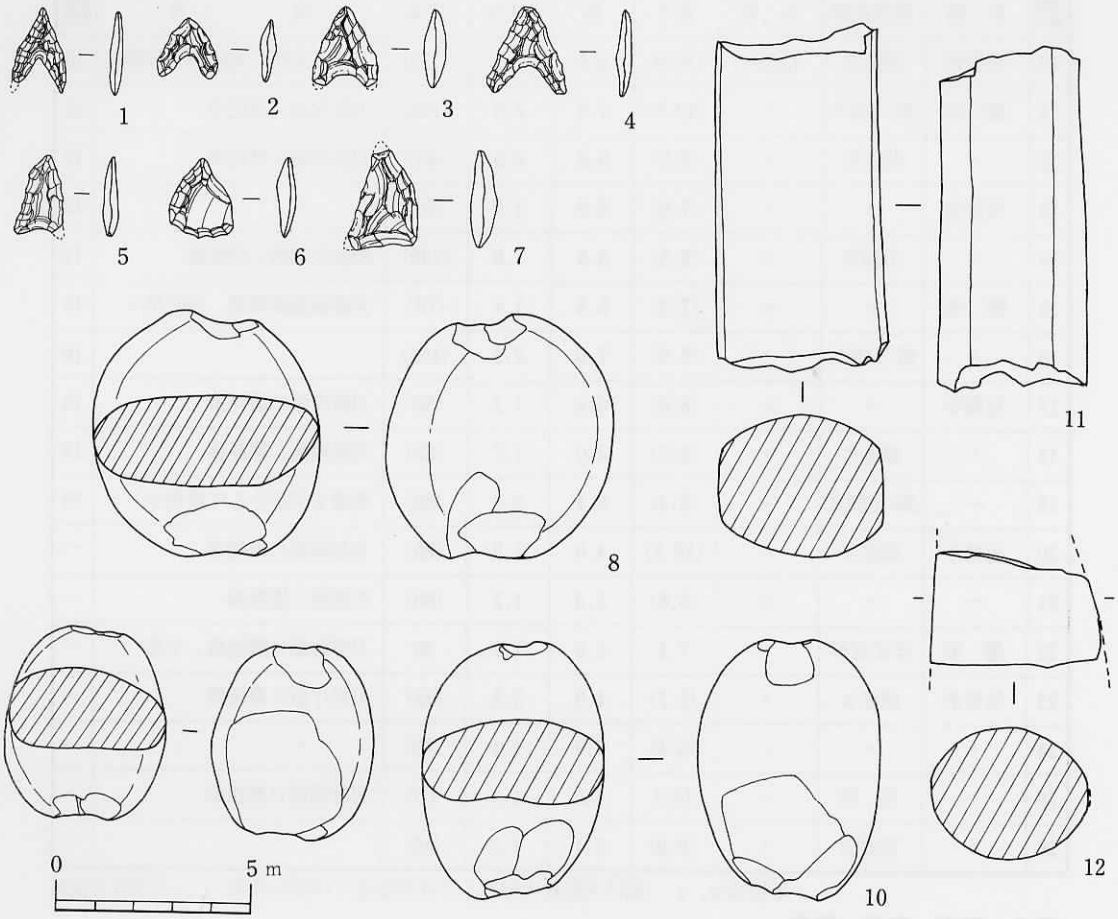
また、この他には図版10のスクレイパーが出土した。下呂石の剝片に簡単な調整を施し、刃部としたものである。



第8図 袖裏遺跡出土石器(石斧)



第９図　袖裏遺跡出土石器(凹石、磨石)



第10図　袖裏遺跡出土石器(石鏃、その他)

表2　石斧一覧表

遺物番号	形　態	遺存状態	石　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考	挿図番号
1	定角式	刃部欠	片磨岩？	(15.0)	6.0	3.1	(500)		1
2	乳棒状	〃	〃	(8.2)	5.4	2.6	(165)		2
3	撥　形	ほぼ完形	粘板岩	(10.9)	4.7	1.9	105	刃部表面に磨耗痕	3
4	〃	頭部欠	〃	(11.0)	5.8	1.6	(95)		4
5	短冊形	完　形	〃	12.2	4.2	1.4	90	刃部片面に磨耗痕	5
6	〃	頭・刃部欠	〃	(9.9)	4.6	1.2	(80)	刃部両面に磨耗痕	6
7	撥　形	刃部欠	〃	(9.9)	4.3	1.4	(65)		7
8	〃	〃	〃	(7.3)	4.0	1.4	(55)	頭部側面に磨耗痕	8
9	短冊形	頭部欠	〃	(7.9)	5.3	1.6	(95)	刃部片面に磨耗痕	9

遺物番号	形　態	遺存状態	石　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考	挿図番号
10	短冊形	頭部欠	粘板岩	(10.0)	4.6	1.7	(110)	刃部、頭部に磨耗痕、再使用	10
11	撥　形	頭・刃部欠	〃	(10.3)	7.3	2.3	(195)	刃部片面に磨耗痕	11
12	〃	頭部欠	〃	(9.5)	5.2	0.9	(65)	刃部両面に磨耗痕	12
13	短冊形	〃	〃	(7.6)	5.5	1.0	(70)	〃	13
14	〃	刃部欠	〃	(9.3)	5.5	1.6	(130)	頭部上端部に研磨面	14
15	撥　形	〃	〃	(7.3)	5.6	1.4	(70)	刃部破損面研磨、再使用か	15
16	〃	頭・刃部欠	〃	(5.9)	7.0	2.2	(105)		16
17	短冊形	〃	〃	(8.0)	4.6	1.2	(50)	刃部片面に磨耗痕	16
18	〃	頭部欠	〃	(8.5)	4.0	1.7	(85)	刃部両面に磨耗痕	18
19	—	頭・刃部欠	〃	(8.4)	6.1	0.8	(60)	側面を刃部として使用か	19
20	短冊形	頭部欠	〃	(10.2)	4.0	1.2	(80)	刃部両面に磨耗痕	—
21	—	〃	〃	(6.8)	5.3	1.3	(60)	片側面に磨耗痕	—
22	撥　形	ほぼ完形	〃	7.1	3.8	1.0	30	刃部両面に磨耗痕、小形	—
23	短冊形	頭部欠	〃	(5.7)	4.9	2.2	(85)	刃部片面に磨耗痕	—
24	〃	〃	〃	(8.4)	5.0	1.4	(70)	〃	—
25	〃	完　形	〃	14.1	4.0	1.9	110	刃部両面に磨耗痕	—
26	〃	刃部欠	〃	(9.0)	3.4	1.2	(40)		—

単位はcm、g　幅は刃部最大幅もしくは刃部近くの幅を計測。(　)は残存計測値

表3　凹石、磨石一覧表

遺物番号	形態	石　質	長径	短径	厚さ	重量	備　　考	挿図番号
1	円形	花崗岩	9.9	8.8	5.0	700	両面に凹み、側面に研磨による稜	1
2	〃	安山岩	9.5	8.8	6.0	745	〃　全面に研磨痕	2
3	〃	花崗岩	10.0	9.3	6.1	820	片面に凹み、裏、側面に敲打痕	3
4	〃	〃	9.2	8.2	4.3	550	両面に凹み、全面研磨痕、側面に敲打痕	4
5	〃	セン緑岩	8.4	7.2	4.3	420	〃　、側面に敲打痕	5
6	楕円	安山岩	10.3	8.0	5.5	660	片面に凹み、全面に研磨痕	6
7	〃	〃	11.5	9.3	7.0	1,055	両面、側面の3ヵ所に凹み	7
8	〃	濃飛流紋岩	9.5	7.8	4.6	495	片面に凹み、裏面に研磨痕	8
9	〃	安山岩	8.8	6.9	3.8	350	全面に研磨痕	9
10	円形	濃飛流紋岩	12.2	11.6	7.0	1,445	両面に凹み、全面に研磨痕	10
11	楕円	〃	13.6	8.6	5.6	1,100	両面に凹み、研磨による稜	11

(単位 cm、g)

Ⅴ．まとめ

八幡４号古墳について

墳丘はすでに削平され、規模、形などは明らかにする事が出来なかった。また、周溝等外部施設についても調査区域に於ては検出されず、周溝の存在は明確にすることが出来なかった。

石室は川原石積みの石室で、土田渡古墳群や川合古墳群の群集墳に一般的に見られるものであった。

副葬品は、玄室床面より須恵器、鉄鏃が検出された。須恵器は古くからの盗掘、削平により器形が知れるものは無蓋高杯、瑞のみで、東海地方の須恵器編年（註７）の第Ⅱ期第３小期から第４小期に該当するものと思われる。

７世紀後半以降、群集墳の造営は発展し最盛期を迎えると言われるが、当古墳もまさにその一つであり、かつては「百々塚」と呼ばれた土田渡古墳群がそれを証明するものであった。

袖裏遺跡について

古くより知られる袖裏遺跡について、今回の調査でその内容の一部が明らかとなった。

調査区域は、当遺跡の北端に位置するものと思われ、遺跡の範囲は南は県道美濃加茂可児線近くまで、東は渡公民館付近まで広がり現在の渡り集落とほぼ同じ宏大な遺物散布地であることがわかった。

住居跡の検出は今回出来なかったが、出土土器により縄文時代中期後半から後期後半、弥生時代中期、古墳時代と、長く継続的に集落が営まれたことが判明した。

大集落跡である袖裏遺跡を成立せしめた生活基盤等、今後解明しなければならない問題を今回の調査は提起し、改めて本遺跡の重要性を確認することが出来た。

註

1．中島勝国氏の調査による。古老の記憶に基づいて調査されたもので同氏の御教授による。

2．中島勝国編　「可児町史　通史編」　可児町　昭和55年　第一章原始に実測図所収。

3．林魁一　『美濃国可児郡土田村ソデウラの古墳』　東京人類学雑誌第287号 明治43年
　〃　『美濃国可児郡ソデウラの石器時代遺跡』東京人類学雑誌第199号 明治35年
など古くから知られていた。

4．楢崎彰一他　「中村遺跡」　中津川市教育委員会　昭和54年

5．紅村弘、増子康真他　「東海先史文化の諸段階（資料編）」　昭和54年

6．同上

7．楢崎彰一　「後期古墳時代の諸段階」　名古屋大学部十周年記念論集　昭和34年

Ⅵ 図　　版

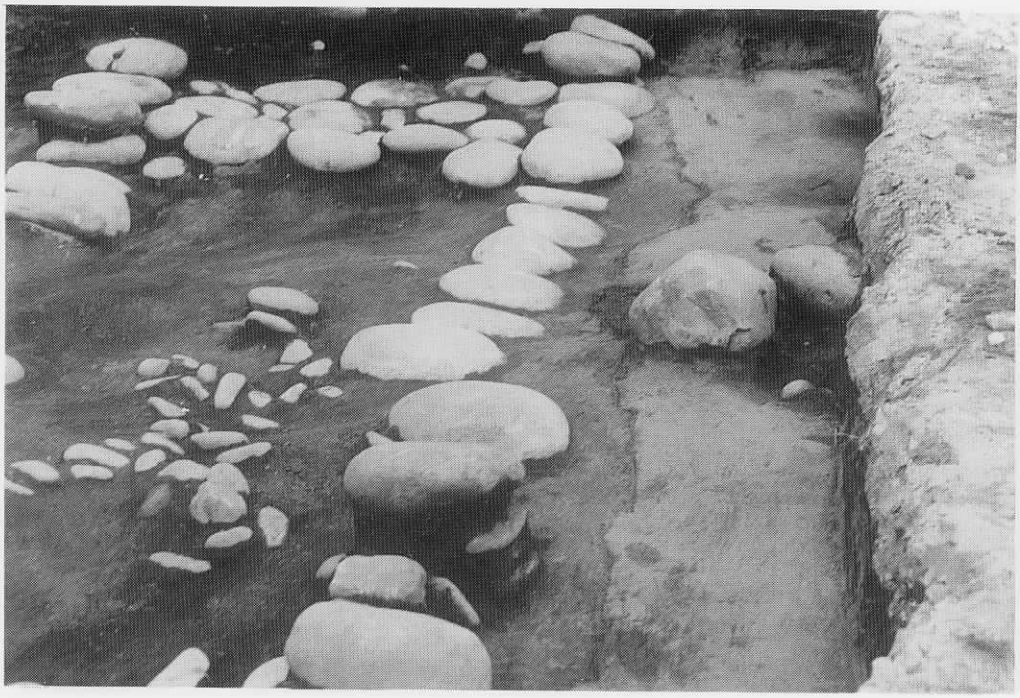
図版1

調査前全景

八幡4号古墳主体部全景

図版2

玄室奥壁



右側壁地山掘込み面

礫床除去後全景

無蓋高杯出土状態(奥壁床面)

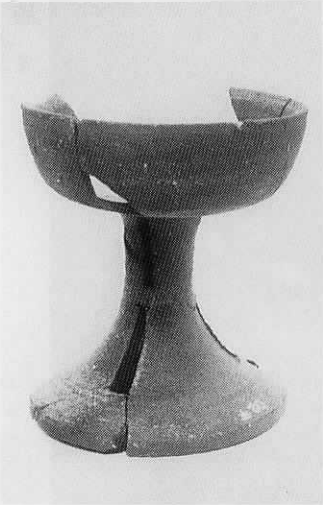
図版4

袖裏遺跡溝状遺構A

袖裏遺跡溝状遺構B

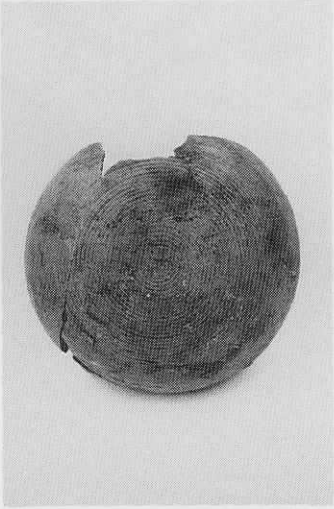
八幡4号古墳出土遺物

図版5

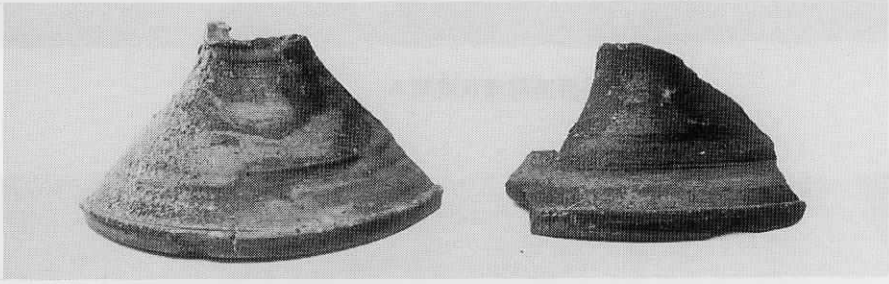


無蓋高杯

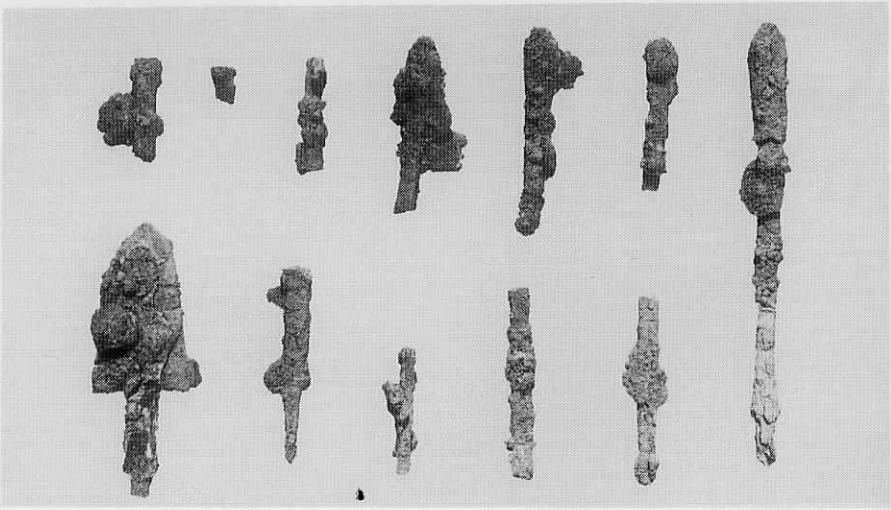
瓿



提瓶体部



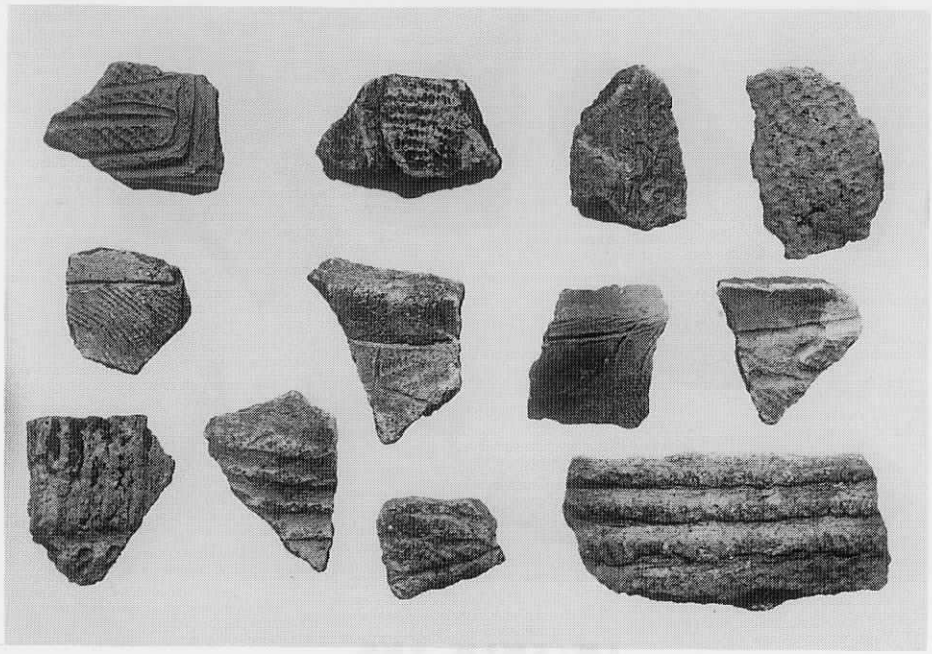
高杯脚部



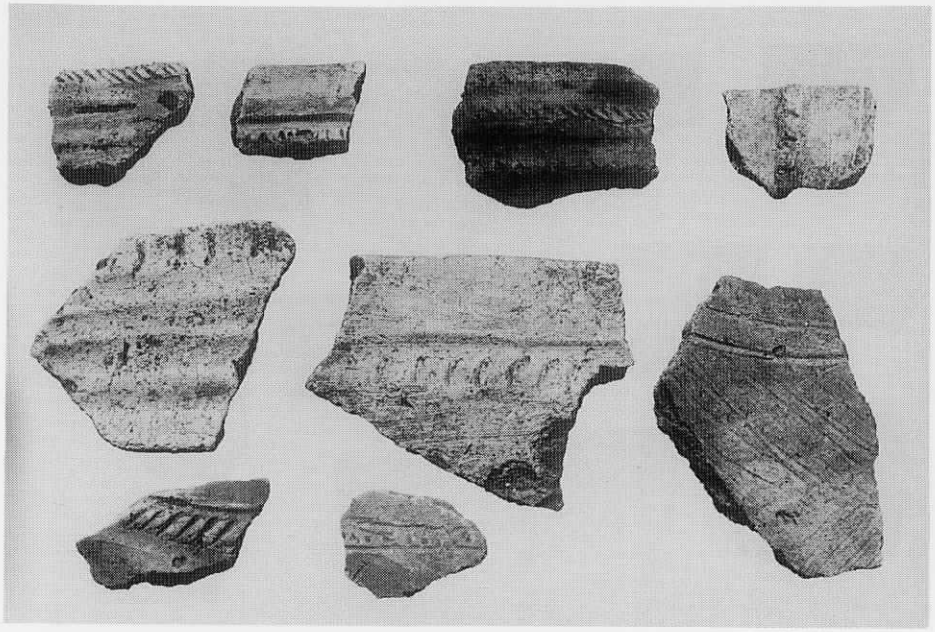
鉄鏃

袖裏遺跡出土遺物

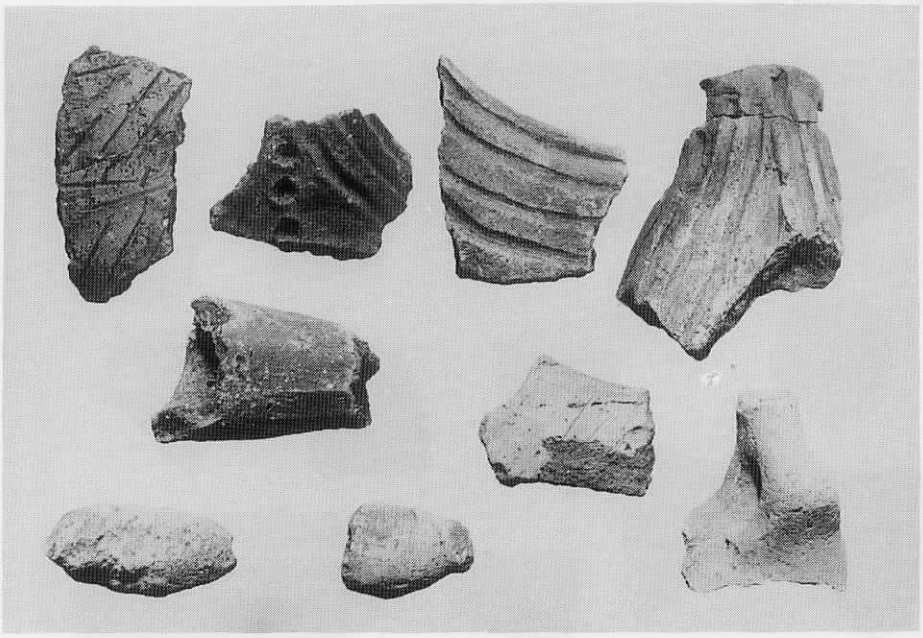
図版6



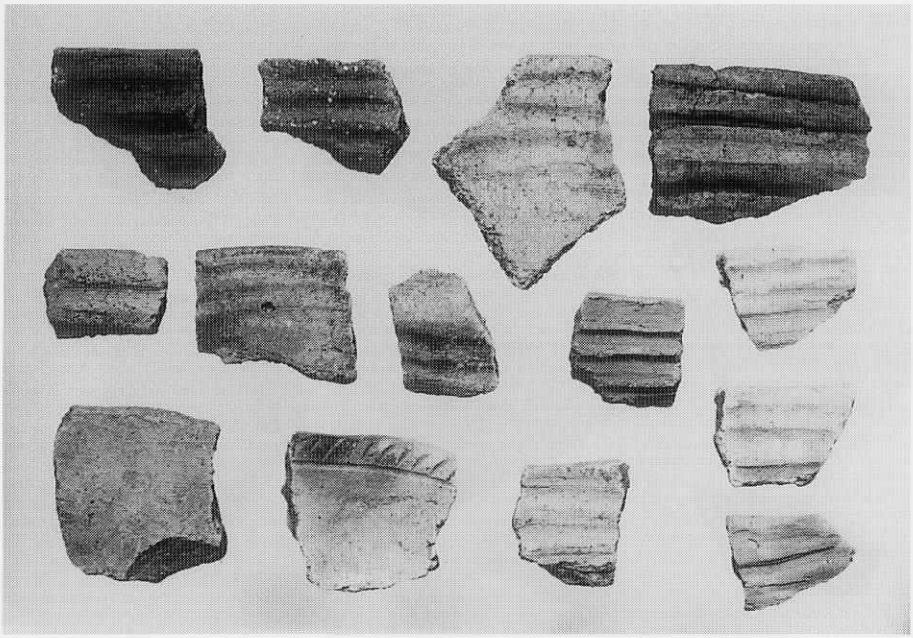
1 類 土 器



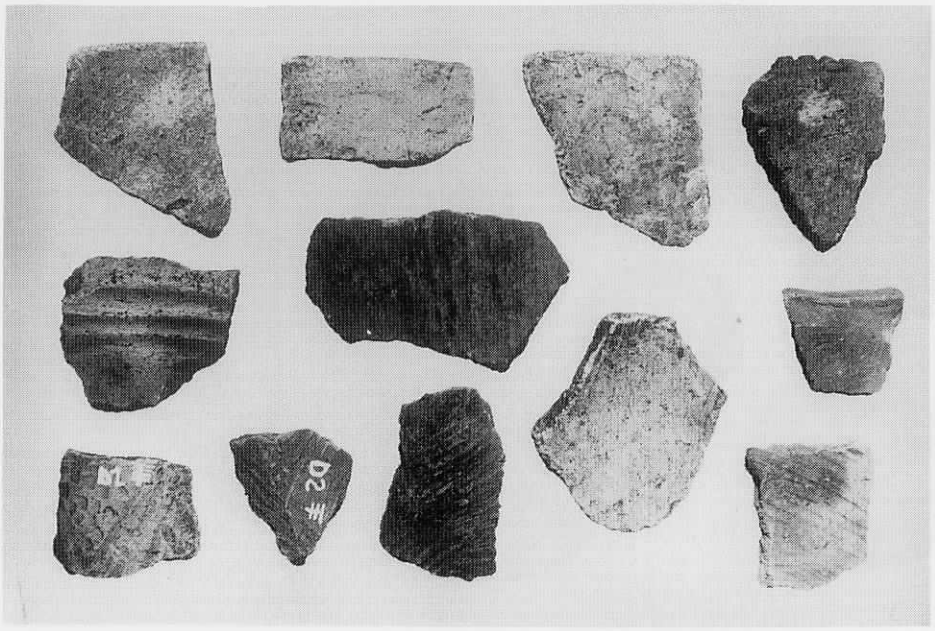
2類・3類土器



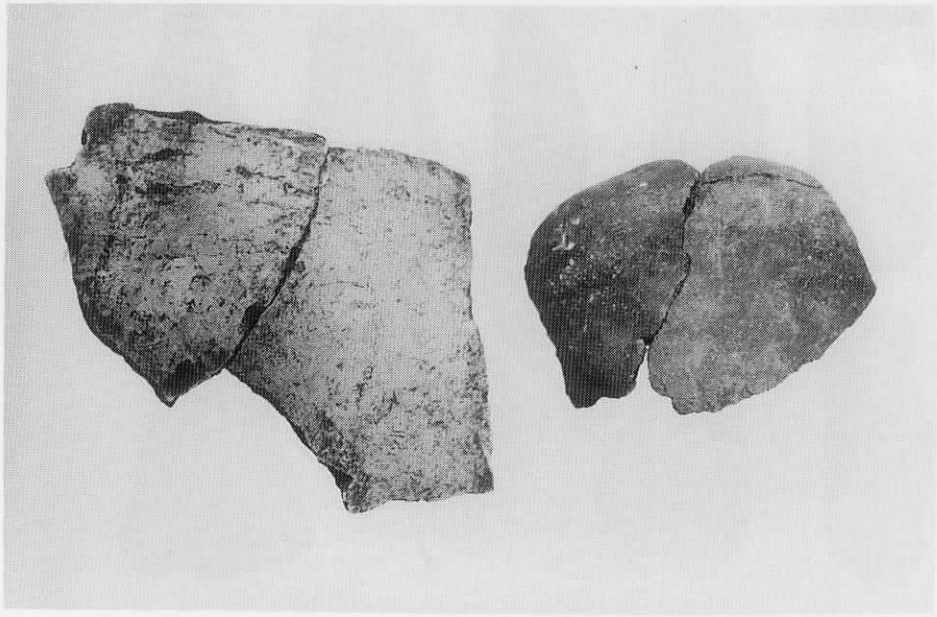
4類・6類土器、土製品



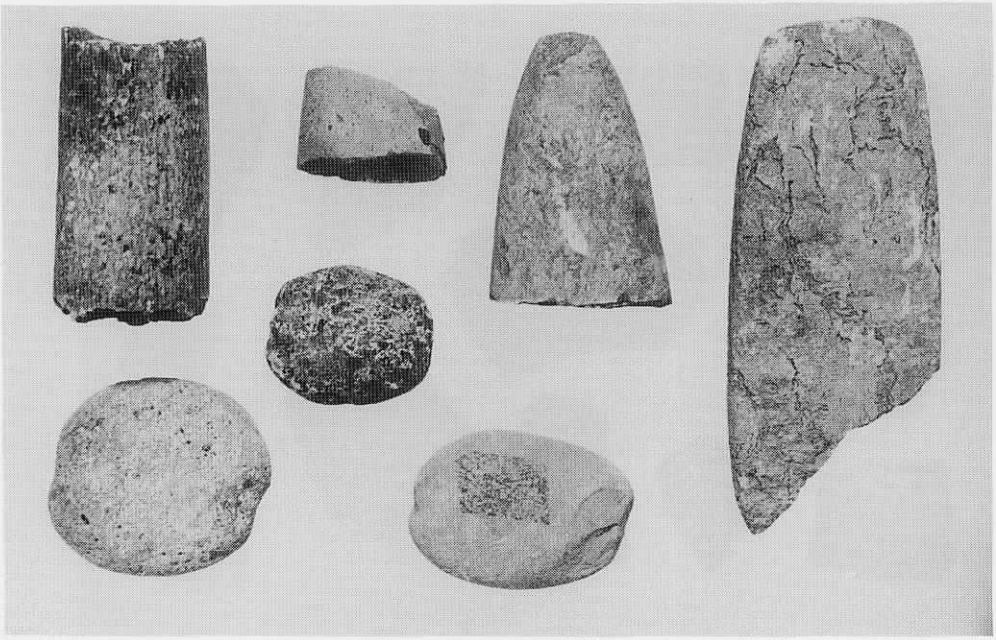
4　類　土　器



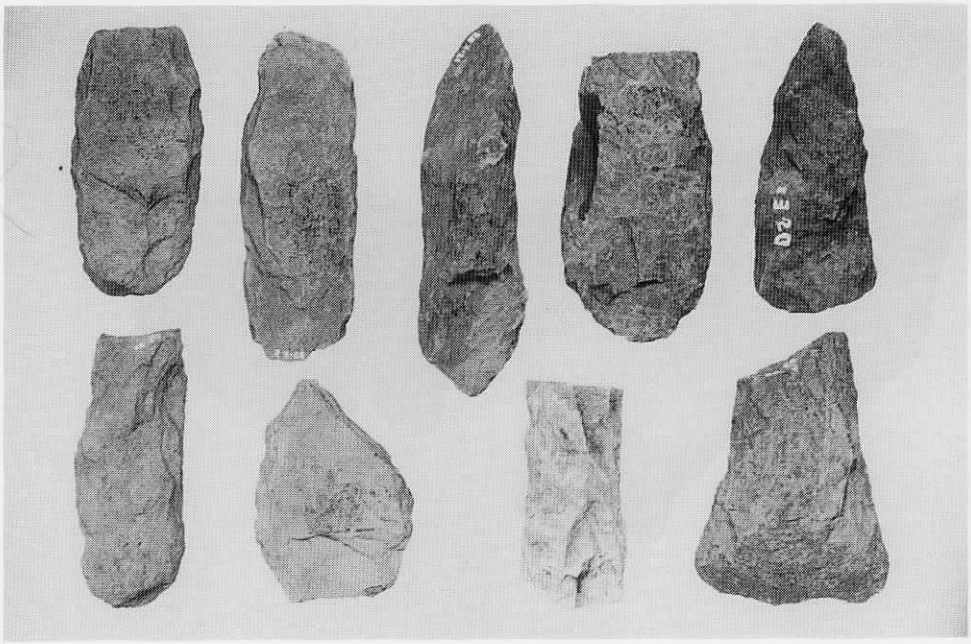
5類土器・弥生式土器



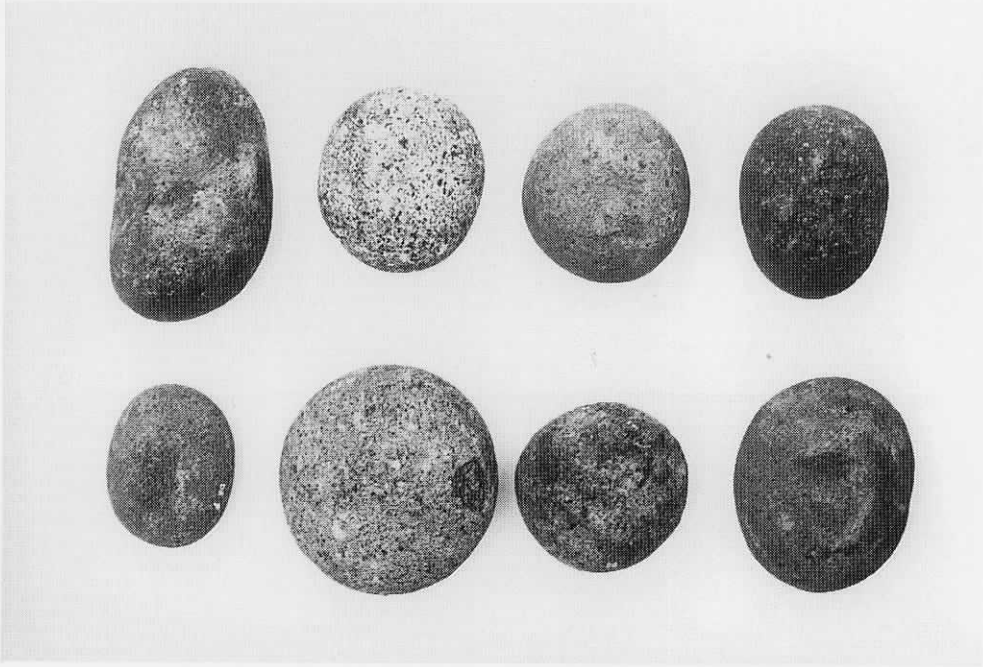
弥 生 式 土 器



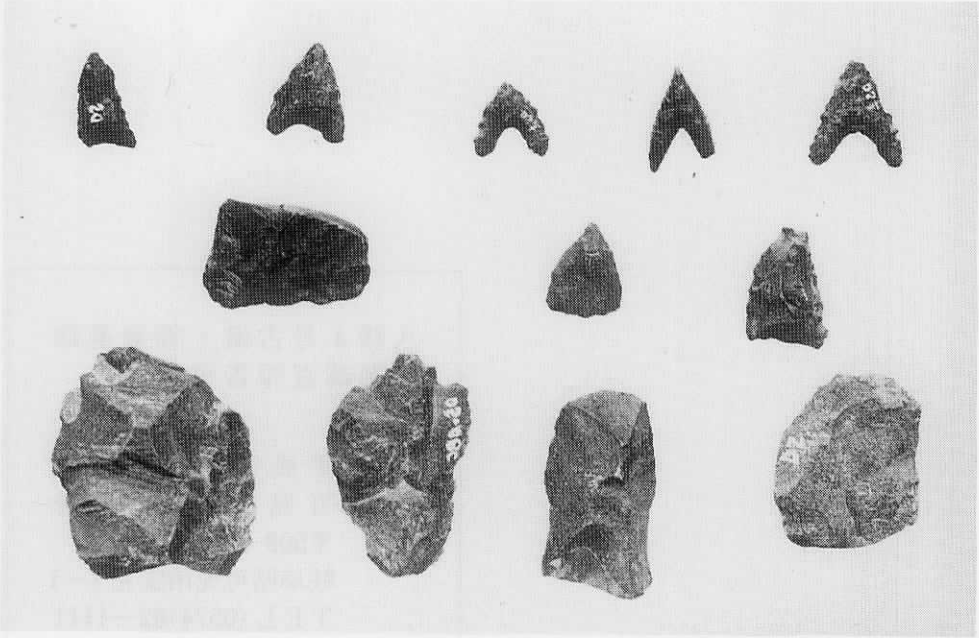
磨製石斧・石錘・石棒



打　製　石　斧



凹　石・磨　石



石鏃・スクレイパー

八幡4号古墳・袖裏遺跡
発掘調査報告書

発行　平成2年3月31日
発行　可児市教育委員会
〒509-02
岐阜県可児市広見1—1
TEL(0574)62—1111
印刷　可児電子印刷